組織研究の脱構築
―組織分析諸モデルの意義を探って―

梶　脇　裕　二

要　旨

本稿では Burrell and Morgan（1979）の組織分析の前提となっていた客観＝主観次元、モダニズム＝ポストモダニズムの二元論を脱却しようとする Deetz（1996）、Hassard and Cox（2013）、Boisot and McKelvey（2010）の組織分析諸モデルをレビューし、現代の組織研究の科学性と方法論の動向を探っていく。ここでは組織研究が、既存の研究上の伝統を脱構築していくことが明らかとなり、さらに今後「実体なき実在性」にもとづいて組織現象を理解していく可能性があることも指摘される。

キーワード： 組織分析（Organisational Analysis）、二元論（Dualism）、脱構築（Deconstruction）、複雑性の科学（Complexity Science）、実体なき実在性（Realism without Reality）

I　はじめに

Burrell and Morgan（1979）の組織研究の分析モデル（以下、BM モデル）に含意されていた通訳不可能性が、その後のパラダイム間論争を生んだのであれば、そこでの争いは、組織研究それ自体の科学性を追究するという本来的な意味での組織研究の分析目的から離れ、各パラダイム間の優劣を競い合おうとする狭量な組織研究内での内部抗争から生じたものといえる。

Fabian（2000）はそうした事情を敏感に感じ取り、組織研究の分析（以下、組織分析）を本来の議論に回帰させるため、パラダイム間関係に関する立場を類型化し、それぞれの特徴を示した。さらにそれだけでなく、組織研究の

深化にともなって絶えず新しいアプローチが生み出される原因をも究明し、それが組織研究に対する固有の科学的要求と実践的要求にあることを明らかにした（Fabian 2000, p. 359ff.）。

現在、組織研究はこうした諸要求に直面しながら、なおいっそうの変化圧力にさらされており、そのなかにはBMモデルを刷新するような組織研究の新しいフロンティアを切り拓いていこうとする試みも現れている[1)]。そこでは、客観＝主観次元、モダニズム＝ポストモダニズムの二元論を解消し、同一次元での方法論的融和を唱える傾向にある。

組織研究の科学性と方法論を問うという組織分析の本来的な議論からすると、こうした客観＝主観の問い直しやモダニズム＝ポストモダニズムの二元論的対置の脱却は、組織研究の現在の科学的状況を把握する上で格好のトピックといえよう。というのも、組織研究の科学性はすくなからず哲学の現況に影響を受けており、その点で昨今の現代思想では「実体なき実在性」（藤本 2015, 94頁）をとりいれ[2)]、認識する側の主体と認識される側の客体の壁を取り払おうとする主張が注目されているからである。

そこで本稿においては、これら二元論を乗り越えようとする組織分析モデルのいくつかをレビューし、組織研究（史）におけるそれらの意義を探っていく。本稿の結論を先にしていえば、それが「組織研究の脱構築」にあることを突き止めている。この「脱構築」によって科学の営みとして、パラダイムあるいはディスコースの対立と解体の再生産が組織研究において繰り返されていく必然性が明らかとなる。それを踏まえたうえで、今後の組織研究が新たな方法論的仮定にもとづいて組織現象を理解していく可能性があることも最後に指摘する。

1） たとえば、Westwood and Clegg（Eds.）（2003）; Easterby-Smith, Thorpe and Jackson（2015）

2） 実在と現象の関係を問いなおし、実在を捨象した現象だけをみるのではなく、かといって本質（秩序・法則体系）としての実在を想定するわけでもないという考えが唱えられている。

Ⅱ　組織分析の言語論的転回

1. Deetz（1996）の問題関心

本節では、1996年に発表されたDeetz（1996）の組織分析モデルを概観してみる。まずDeetzは、BMモデルがBurrell and Morgan自身の想像を上回るほどの反響を生み、圧倒的な力をこれまで有してきたと評価している。しかし、それ以後の組織研究の進展はかれらの組織分析の問題を浮き彫りにしており、この分析の有効性を今一度検討する必要があるとした（Deetz 1996, p. 191）。その際かれは、現在のリサーチ・プログラム（ディスコース）の同質性と異質性を明確に認識し、現在進行中のコンフリクトや対立をより生産的なものにするため、各パラダイムの具体的な内容やパラダイム間の通訳不可能性を問題にするのではなく、類型化基準そのものを再考しようとした（Deetz 1996, pp. 191-192）。

そもそも、Deetzによると、BMモデルでは、Burrell and Morganが意図していたのとは別に、機能主義者パラダイムに支配的なポジションが与えられ、「それに対する外部の、あるいは他者としての」その他パラダイムが対置された（Deetz 1996, p. 192）。つまり、それは中心（機能主義者パラダイム）があって初めてその周辺（その他パラダイム）が成り立つという関係である。その結果として機能主義者パラダイムには特権的な地位が与えられる一方、新しいアプローチは不適切な形で、その他パラダイムのなかに一緒くたに位置づけられてしまった（Deetz 1996, p. 192）。

Deetzは、この基本的な原因が客観＝主観の二元論的分類にあると考え、問題点を3つ指摘する（Deetz 1996, p. 193）。1つ目は、客観＝主観の二元論的分類が自然のものではなく、社会的に作られているという点である。一般的に、価値中立的で「客観的」とみなされるアプローチは、研究者の意図や価値が介入することなく、主体とは独立的な現象を明晰な手段（この場合は量的手法）で明らかにしていくプロセスだと考えられている。しかしDeetzによると、客観的リサーチの問題設定、成果の妥当性、主体世界への

再翻訳は、常に社会的効果をもつよう意図された価値負荷的な側面を含んでいる（Deetz 1996, p. 194）。そのため、客観的リサーチを行う研究者は自らが気づかないうちにその価値を前提にしている。つまり、客観的リサーチといえども、そこには隠れた主観性が潜んでいるのである。

２つ目は、この分類が機能主義者パラダイムの勢力を維持し、その他のリサーチ・プログラムの貢献を正当に評価していない点である。Deetz によると、最近の組織研究の進展のなかでは客観＝主観の区分を否定する研究があるにもかかわらず、二元論的分類はむしろ学術組織その他で力の強いグループのアイデンティティを維持・強化するのに役立っている。この分類を意識すればするほど、機能主義者パラダイムを採用する者が多くなる（Deetz 1996, p. 194）。したがって、この二元論的分類は必然的に機能主義者パラダイムの拡大再生産を支えることになっている。

そして３つ目は、この分類によって非生産的なコンフリクトと質的＝量的方法への大きな誤解が生まれていることである。たとえば質的方法にたいしては「主観的」というイメージが結びつくことによって、純粋な沈思黙考と厳密な解釈作業の違いが分からなくなっている（Deetz 1996, p. 194）。また質的方法と量的方法の違いが単にデータ収集法の違いにすぎないなどの誤解もされている。そうではなく、重要な点は問題設定と分析を行う意図であり、分析様式は様々な理由から、様々な対象を研究する際に生まれるのである（Deetz 1996, p. 194）。Deetz からすると、従来の二元論的分類にはこうした諸問題が伏在しているのであった。

2. ローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリ次元とコンセンサス＝ディスセンサス次元

従来の二元論的分類が以上のような問題をもつことから、Deetz は①ローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリと②コンセンサス＝ディスセンサスという２つの次元を新たに設けて組織研究の再類型化を試みている。まず、①ローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリの次元では、リ

表１：ローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリの次元の特徴

ローカル／エマージェント	エリート／アプリオリ
比較可能な諸コミュニティ	優先されるコミュニティ
多元的言語ゲーム	固定化された言語ゲーム
特殊的	普遍的
エスノセントリックとしてのシステマティク哲学	システマティック哲学への望みに根拠づけられる
反理論的	理論志向
状況的あるいは構造的決定主義	方法論的決定主義
非原理的	原理的
ローカル・ナラティブ	進歩や解放のグランド・ナラティブ
中心的関心としての情緒や意味	中心的関心としての合理性と真理
状況にあった実践的知識	一般化可能な理論的知識
女性的な態度傾向	男性的な態度傾向
異質なものを見る	同質なものを見る
他者から生じる	自己から生じる
「他者性」の存在論	実際の仮説に関する認識論的・手続き的項目ルール

（出所）Deetz 1996, p. 195

サーチ・コンセプトがどのように生まれるかがポイントとなる。その違いは表１のとおりであるが、エリート／アプリオリ極では理論が優先される傾向にある。Deetz によると、この極での研究対象の諸内容は言語システムのなかでコード化され、一般化が目指される。したがって、ここでは合理的な知識の産出が期待され、伝統や特定の信念システムによる制約は受けない（Deetz 1996, p. 196）。

一方のローカル／エマージェント極にはオープンな言語形態を使って、壮大にならない程度の知識を生むリサーチ・プログラムが入る。ここでは感情や直観、また合理性の多様な形態に関心をもち、定点からではなく、別の観点からの洞察によって生まれるストーリーや説明を通じて、研究対象の理解が深まる。「他と『似ていないこと』」（The “otherness” of other）を探し求める、この極の研究者は、知識生産を行うコラボレーターとみられている（Deetz 1996, p. 196）。

このような次元を設けることで、３つの利点があるとDeetzは指摘する。１つ目はあらゆるリサーチ・ポジションのなかに言語／社会構成主義を認識することができる点である。これは、いかなるリサーチ・ポジションであれ、ある特定の観点から対象が規定されているということである。２つ目はこの次元が知識の様々な種類を分類することに役立つという点である。これはたとえば、エリート／アプリオリ極では「理論的にコード化された」知識を発展させているのに対し、ローカル／エマージェント極では「実践的な」知識を発展させているというようなことである。そして３つ目は、こうしたリサーチ・プログラムが様々なグループ（利害関係者）と暗黙的にも明示的にも政治的な関わりをもつことを示している点である（Deetz 1996, p. 196）。

このようにして、Deetzはローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリの次元を規定したのち、もう１つの②コンセンサス＝ディスセンサスの次元にも言及する。この次元は表２にまとめられている。Deetzによると、これはリサーチと既存の社会秩序との関係を問うもので、基本的にBMモデルのレギュレーション＝ラディカルチェンジの次元と通じている[3)]。コンセンサス極では秩序を探求し、自然・社会システムの支配的側面としての秩序を取り扱うリサーチ・プログラムが含まれる。それゆえここでは秩序は自然とみなされ、ランダム性やばらつきなどは軽視される。コンフリクトやフラグメンテーションは秩序維持のためのシステム問題として扱われる（Deetz 1996, p. 197）。

それに対しディスセンサス極は、闘争、コンフリクト、緊張のある場を自然状態と考えるリサーチ・プログラムを含んでいる。問題の対象であるコンフリクトなどを解消するためにディスセンサス極にあるプログラムは秩序を見直し、その改革に挑むことを目的にしている。そのためここでは人間の非規範的な側面や特別な対応などに注目し、ランダムな偶然性にも力点がおか

3） ただ、それよりも視点をより広く捉え、とくにディスセンサス極では階級闘争だけでなく、環境問題、経済成長、テクノクラシー、人間内部の抑圧要因などの問題にも焦点を当てている（Deetz 1996, p. 197）。

表２：コンセンサス＝ディスセンサスの次元の特徴

コンセンサス	ディスセンサス
信用	疑念
自然状態としてのヘゲモニー秩序	自然状態としての秩序をめぐるコンフリクト
現在の自然化	歴史と政治の積み重なる現在の秩序
統合と調和が可能	秩序は支配を意味し、コンフリクトを抑える
研究は説明に重きをおく	研究は挑戦と再検討（説明）に重きをおく
支配的なメタファーとして（反射する）鏡	支配的なメタファーとして（見る・読む）レンズ
中心的関心としての妥当性	中心的関心としての洞察・実践
抽象としての理論	発端としての理論
統一科学とトライアンギュレーション	立場の補完性
科学は中立的	科学は政治的
生活は発見	生活は闘争と創造
自律的で自由なエージェント	歴史的で社会的に埋め込まれるエージェント
研究者は匿名で、時間と空間の外にいる	研究者は特定され、位置づけられる

（出所）Deetz 1996, p. 197

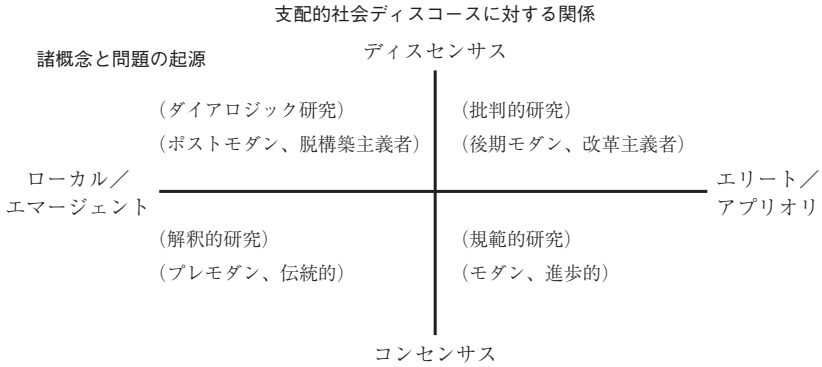
れる。従来までの指導仮説や価値に挑戦する力こそ、このリサーチ・プログラムの核である。そのためその方法は「アンチ実証的」になる（Deetz 1996, p. 197）。

3. ４つの研究ディスコース

Deetz は以上のような２つの次元を設け、ここから得られる４つの象限に「規範的研究ディスコース」「解釈的研究ディスコース」「批判的研究ディスコース」「ダイアロジック研究ディスコース」と名づけたリサーチ・プログラムをそれぞれ配した（図１）。

第４象限の規範的研究ディスコースは BM モデルでの機能主義者パラダイムと大方一致するもので、客観主義、操作化、法則、統計的手法、仮説設定に代表されるプログラムである。そこで獲得される知識は実証的かつ進歩的で、その累積が社会の改善にもつながると信じられている。その意味でマルクス主義の研究もこうした規範的テーマと結びついている（Deetz 1996, p.

図１：代表的諸実践のメタ理論の対照次元



（出所）Deetz 1996, p. 198

201）。

第３象限の解釈的研究ディスコースでは、組織の社会的側面が強調され、規範的研究ディスコースのなかでは取り上げられなかった生活への関心がある。これはもっぱら、研究者がフィールドに入り、日常活動の長期的な観察とインタビューによってその現実の社会的構成を明らかにすることで実現されうる（Deetz 1996, pp. 201-202）。その意味で研究対象と研究者は共同の意味を創造しうる「協働者」とされる。

第１象限の批判的研究ディスコースにおいては組織が闘争・支配のもとで生まれる社会歴史的産物（政治的な場でもある）であるとみなされる。ここでは、制度や組織内での虚偽意識、同意（consent）、ゆがんだコミュニケーション、ルーティン、ノーマライゼーションなどを通じて構成される現実の偏りを批判することで、コンフリクトが公に議論され、その是正が図られる（Deetz 1996, pp. 201-202）。

第２象限のダイアロジック研究ディスコースは、人や現実の構成的性質に焦点をおき、そうした構成時の言語の役割を強調するプログラムである。グランド・セオリーの構築には否定的である。また支配システムにおける権力・知識のつながり、専門知識の役割を重視し、さらに現代世界の流動性・ハイ

表３：プロトタイプの様々な側面

項目	ディスコース			
	規範的	解釈的	批判的	ダイアロジック
基本目的	対象間の法則的関係	統一的文化の提示	支配の暴露	コンフリクトの更生
方法	法則定立科学	解釈学、エスノグラフィー	文化批判主義、イデオロギー批評	脱構築、genology
可能性	進歩的解放	統一価値の再生	社会秩序の再編	失われた声に場を与える
社会関係のメタファー	経済的	社会的	政治的	大衆的
組織のメタファー	マーケットプレイス	コミュニティ	政治組織体	カーニバル
提起される問題	非効率、無秩序	無意味、非合法	支配、同意	排斥、コンフリクト抑圧
コミュニケーション	忠誠、影響、情報ニーズ	社会的な文化変容、グループ容認	誤認識、システムの歪み	ディカーシブクロージャー
ナラティブ・スタイル	科学的・技術的、戦略的	ロマンティック、包摂	治療的、指示的	皮肉的・アンビヴァレント
時代アイデンティティ	モダン	プレモダン	後期モダン	ポストモダン
組織の長所	コントロール、専門知識	コミットメント、クオリティ・ワーク・ライフ	参加、知識の拡張	ダイバーシティ、クリエイティビティ
ムード	楽観的	友好的	猜疑的	陽気的
社会的な不安	無秩序	非人格化	権威	全体化、ノーマライゼーション

（出所）Deetz 1996, p. 199

パーリアル性とマスメディア・IT の役割にも注視している（Deetz 1996, p. 203）。このディスコースは、これらの課題に対しレトリック、フィクション、ナラティブを駆使してその内実に迫る[4)]。以上の特徴は表３にまとめられている。

Deetz は各ディスコースではそれぞれの問題設定に、それぞれが独自のアプローチを展開して回答を用意してきたとし、それらの間にある相違や同質性をあらたに見通せるようにしたとしている。ただ、これらを通じて研究者すべてが各ディスコースにオープンな姿勢で、全てに精通する必要はないと

4）Deetz によると、批判的研究ディスコースと違って、ダイアロジック研究ディスコースでは支配が固定化されず状況的なものとみなされ、集団のアイデンティティや個人のアイデンティティも一元的・固定的なものではない。したがって、日々の生活の現実、意味、自己認識のなかに潜むコンフリクトや抑圧性をあぶり出し、ローカル的な抵抗を高めることがその目的となり、批判的ディスコースのような大きな世界での改革を決して志向しているわけではない（Deetz 1996, p. 203）。

も断っている（Deetz 1996, pp. 203-204）。

というのも、そうしたマルチパースペクティブな姿勢は浅薄な知識に終始しかねないからで、１つの方向性での真摯な取り組みが評価されることをかれは望んでいる。しかし、問題設定や研究手続きに関するそれぞれのディスコース間での補完性はもちろんよいことであって、なにより、各々があらゆるディスコースの目的の正当化と明確化を検討する余地をもち、各々に関心を示すことが重要である、と結論づけている（Deetz 1996, p. 204）。

Ⅲ　ポスト構造的パラダイムの出現

1．第３機軸の追加

Hassard and Cox（2013）は、BM モデルの枠組みを継承しつつ、1990年代以降の組織研究にみられる新潮流の動きを取り入れて、これまでの組織分析を更新しようとした。本節ではかれらの所論をまとめてみる。さてここでの新潮流とはなにかであるが、Hassard and Cox が意図していたのはポスト構造主義・ポストモダニズムの思考に基づいた組織研究の展開である。それは BM モデルがすでに設定していた（Hassard and Cox がいうところの）構造的パラダイム、アンチ構造的パラダイムに加えて、あらたに設けられる第３の機軸といえるものであった。

Hassard and Cox によると、ポストモダニズムにおいて人間主体は外部刺激に反応して行動しているわけではなく、また生き生きとして世界に投げ出され存在しているわけでもない。そうではなく、それは脱中心化されている（Hassard & Cox 2013, p. 1704）。つまり、これまでの構造的パラダイム＝アンチ構造的パラダイムの文脈で語られてきたのは、実在と現象のパターンをどのようにとらえるかであった。たとえば構造的パラダイムは各要素のつながりを機能的システムにまで統合させる実在としての「メカニズムと差異」（法則性）を認識しようと、究極的にこの実在と現象のマッチングを完全なものにしようとしていた。

一方、実在に懐疑的で、実在と現象のマッチングを問題にせず、現象にあ

表 4 ：組織研究パラダイムのメタ理論

	構造的パラダイム	アンチ構造的パラダイム	ポスト構造的パラダイム
存在論	実在主義者	唯名主義者	相対主義者
認識論	実証主義者	構成主義者	関係主義者
人間性質	決定論者	主意主義者	脱構築主義者
方法論	演繹的	解釈的	再帰的

（出所）Hassard & Cox 2013, p. 1709

らわれる人間精神あるいは思考の産物を世界の中心においたのが、解釈主義・現象学のパラダイムである。アンチ構造的パラダイムと呼ばれるものがそうである。これらのパラダイムにポスト構造的パラダイムを加えて、BM モデルのメタ理論的基準でもって整理すると、それぞれの「社会科学の性質」は表 4 のようになる（Hassard & Cox 2013, pp. 1706-1708）。

2. ポスト構造的パラダイムにおける「社会科学の性質」の次元

Hassard and Cox は、追加された第 3 機軸のポスト構造的パラダイムの代表的な理論として、とりわけアクター＝ネットワーク理論（ANT）をあげている。表 4 からこの ANT のメタ理論的特徴、つまり「社会科学の性質」をとらえようとすると、まずその存在論的特徴は相対主義であるとされる。というのも、ANT では真と偽、善と悪、公正と不公正といった判断がコンテクスト依存的であるとみなされるからである（Hassard & Cox 2013, p. 1710）。

その意味で認識論的特徴も関係主義と特徴づけられる。周知のように、ANT では人間や人間以外のものがアクター（アクタンツ）として相互に関連しあい、その関係網が築き上げられているところに現象が現れると理解されている。したがって組織研究のなかでも、人、観念、テクノロジーの関係が組織内の相互作用のうちに含まれ、それらが一体となってネットワークを形成しているとみなされる（Hassard & Cox 2013, p. 1711）。Hassard and Cox がいうように、「アクター＝ネットワークは継続的なメイキングと再生があ

るところでのみ存在するので、そうしたネットワークが解体されないよう繰り返し実行される必要がある関係」（Hassard & Cox 2013, p. 1711）なのである。こうした関係主義は ANT の根幹部分を形成する。

また人間性質に関しては、Hassard and Cox は ANT を支持するかぎり、主体の完全な独立性と自立性を想定できないため、その性質も規定できないとしている（Hassard & Cox 2013, p. 1711）。Derrida 流にいえば、ロゴス中心主義からの人間像が後景に退き、構造的パラダイムのような外部環境に機械的に反応するのではなく、またアンチ構造パラダイムのような主体の自由意志が中心にあるわけでもなく、むしろ、人間主体は関係的に脱中心化されている（Hassard & Cox 2013, p. 1711）。こうした意味においてポスト構造的パラダイムの人間性質は脱構築主義と規定されるのである。

方法論については、ANT ではアクター（アクタンツ）の不断の関係性の維持がアクター間のフィードバック作用によるネットワークの発展と変化を生むと考えられている。Hassard and Cox は Latour が Ulrich Beck の再帰的近代化論に言及し、モダニゼーションの発展による「意図されない結果」「副次効果」の産出に関心をもっていたことを指摘しているが、この「再帰性」こそが ANT の方法論的特徴だとしている（Hassard & Cox 2013, p. 1712）。

3.「社会の性質」の次元を加えた 6 つの研究ドメイン

以上が BM モデルですでに示されていた「社会科学の性質」に基づく、第 3 機軸のポスト構造的パラダイムの特徴である。そして、もう 1 つの次元である「社会の性質」についても Hassard and Cox は同じように、その性格を分析している。そもそもこの次元は社会学研究が「社会のどのような性質に力点をおいて展開されているか」を問う基準である。その際、Hassard and Cox は、BM モデルの基準（「レギュレーション＝ラディカルチェンジ」）を援用しつつ、政治的・イデオロギー的観点からリサーチを分類するには、「規範的（normative）」と「批判的（critical）」な方向に分けるのがより適切

であると判断している（Hassard & Cox 2013, p. 1714）。その結果、かれらはメタ・パラダイム基準として「ポスト構造的パラダイム」を加えた表5のような組織研究の類型を提示している。

構造的パラダイムとアンチ構造的パラダイムの研究ドメイン（サブパラダイム）は、従来のBMモデルでなされた機能主義者パラダイム、解釈パラダイム、ラディカル構造主義者パラダイム、ラディカル人間主義者パラダイムにそれぞれ対応している。そのため、Hassard and Coxもこれらについてはあらためて考察を加えていない。ただし、かれらが提示した第3機軸としてのポスト構造的パラダイムの研究ドメインにはくわしい説明を行い、その特徴をさらに追跡している。

規範的ポスト構造的研究ドメインは、かれらによると、Bataille、Derrida、Foucaultといったフランス現代思想の流れを汲んでいる。それは「1つの生産性としての読者とテクストの相互作用」（Sarup 1989, p. 3）を強調し、主体の解体を志向している（Hassard & Cox 2013, p. 1715）。つまり、このドメインでは、もともと構造主義者であったBarthesが「作者の死」として、テクストの（エクリチュール的な）多元性と生成的性質を明らかにし（バルト 1979, 85-86頁）、書く側の自立性＝主体性（あるいは近代性といってもよい）を疑ったように（岡本 2015, 77-78頁）、主体の中心的地位を脱構築し、ANTのような非物質との等値的相互作用から、あるいは主体でも構造でもなくその作用の動態性＝プロセスから（組織）現象を読み取る。

このような主体と構造を脱構築し続けていく作業は、現状を常に変革しようとするエネルギーを内包しており、上述の「社会の性質」の次元からすると、批判的な側面が強くなる。しかし、Hassard and Coxは「Foucaultの著作が『隠れた規範主義者』」（Hassard & Cox 2013, p. 1715）であったと批判するHabermasの言を拠りどころに、ポスト構造的パラダイムが必ずしも批判的思考のみに染まるわけではないとする。実際ANTもラディカルな変革的主張を含まない点を批判されることもあるとしている（Hassard & Cox 2013, pp. 1715-1716）。

表５：組織研究ドメインの類型：理論・理論家・リサーチの例

パラダイム	研究ドメイン	Organization Theory（OT）理論	影響力のある理論家･論者	OT における研究・分析※
構造的	規範的構造的	コンティンジェンシー理論 制度理論 ポピュレーション・エコロジー	Alfred Chandler Philip Selznick Eugene Odum	Donaldson（2001） Greenwood et al.（2008） Aldrich（2008）
構造的	批判的構造的	労働過程論 ラディカル・ウェーバリアン 社会主義者フェミニズム	Harry Braverman Max Weber Shulie Firestone	McCann et al.（2008） Mouzelis（1975） Walby（1986）
アンチ構造的	規範的アンチ構造的	エスノメソドロジー 現象学 社会構成主義	Harold Garfinkel Edmund Husserl Alfred Schutz	Llewellyn & Hindmarsh（2010） Holt & Sandberg（2011） Hosking & McNamee（2006）
アンチ構造的	批判的アンチ構造的	アンチ組織論 クリティカル・ディスコース 批判理論	Herbert Marcuse Norman Fairclough Jürgen Habermas	Anthony（1977） Phillips et al.（2008） Burrell（1994）
ポスト構造的	規範的ポスト構造的	アクター・ネットワーク理論 知の考古学・系譜学 プロセス理論	Bruno Latour Michel Foucault Henri Bergson	Hardy et al.（2001） Hodgson（2000） Tsoukas & Chia（2002）
ポスト構造的	批判的ポスト構造的	オートノミズム ポスト構造的フェミニズム ポスト・コロニアリズム	Antonio Negri Julia Kristeva Gazatri Spivak	Harney（2007） Thomas & Davies（2005） Jones（2005）

（出所）Hassard & Cox 2013, p. 1714　※OT における研究・分析の著作名は 5）に記しておく[5)]。

5） Donaldson, L.（2001）, *The Contingency Theory of Organization,* Sage Publications; Greenwood, R., C. Oliver, K. Sahlin and R. Suddaby（Eds.）（2008）, *The Sage Handbook of Organizational Institutionalism,* Sage Publications; Aldrich, H.（2008）, *Organizations and Environments,* Stanford Business Books; McCann, L., J. Morris and J. Hassard（2008）, "Normalised Intensity: The New Labour Process of Middle Management," *Journal of Management Studies,* 45, pp. 343-371; Mouzelis, N.（1975）, *Organization and Bureaucracy,* Routledge & Kegan Paul; Walby, S.（1986）, *Patriarchy at Work,* Polity; Llewellyn, N. and J. Hindmarsh（Eds.）（2010）, *Organisation, Interaction and Practice: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis,* Cambridge University Press; Holt, R. and J. Sandberg（2011）, "Phenomenology and Organization Theory," *Research in the Sociology of Organizations,* 32, pp. 215-249; Hosking, D. M. and S. McNamee（Eds.）（2006）, *The Social Construction of Organisation,* Liber; Anthony, P.（1977）, *The Ideology of Work,* Tavistock; Phillips, N., G. Sewell and S. Jaynes（2008）, "Applying Critical Discourse Analysis in Strategic Management Research," *Organizational Research Methods,* 11, pp. 770-789; Burrell, G.（1994）, "Modernism, Postmodernism and Organizational Analysis 4: The Contribution of Jürgen Habermas," *Organization Studies,* 15, pp. 1-19; Hardy, C., N. Phillips and D. Clegg（2001）, "Reflectivity in Organization and Management Theory: A Study of the Production of the Research 'Subject'," *Human Relations,* 54, pp. 531-560; Hodgson, D.（2000）, *Discourse, Discipline and the Subject,* Ashgate; Tsoukas, H. and R. Chia（2002）, "On Organizational Becoming: Rethinking Organizational Change," *Organization Science,* 13, pp. 567-582.; Harney, S.（2007）, "Socialization and the Business School," *Management Learning,* 38, pp. 139-153; Thomas, R. and A. Davies（2005）, "Theorising the Micro-politics of Resistance: Discourse of Change and Professional Iden-

ではこうした政治的にラディカルな主張を行う批判的ポスト構造的研究ドメインにはどのような理論が含まれるのか。Hassard and Cox によると、それらの代表的なものはポスト構造的フェミニズム、ポスト・コロニアリズム、オートノミズムである。こうした理論に基づいた具体的なアプローチは表5のとおりであるが、上述のように ANT は政治的イデオロギーをとりたてて前面に押し出さないものの、そのなかのいくつかの研究においては[6]、政治的なメッセージをも発している（Hassard & Cox 2013, p. 1716）。

このようにして、Hassard and Cox は組織研究の現在の進展を取り入れた組織分析モデルを新たに提示し、とりわけポスト構造的パラダイムの代表格として ANT の理論的特徴を具体的に追究した。

Ⅳ　複雑性の科学による二元論の脱却

1. アシュビー空間における次元性

Hassard and Cox は、構造的パラダイムとその反作用（モダニズムとアンチモダニズム）とは異なる、第3機軸としてのポスト構造的パラダイム（ポストモダニズム）の出現に組織研究の新たな潮流をみた。一方 Boisot and McKelvey（2010）は、人間が自然現象・社会現象に適応していくダイナミック・プロセスのなかでは、むしろモダニズムとポストモダニズムが競合的なアプローチではなく、そこには単に多様性へのアプローチの違いがあるだけだとした（Boisot & McKelvey 2010, p. 421）。かれらはこのアプローチの違いを、アシュビー空間（the Ashby Space）から読み解き、モダニズム空間

---

tities in the UK Public Services," *Organization Studies,* 26, pp. 683-706; Jones, C. (2005), "Practical Deconstructivist Feminist Marxist Organization Theory: Gayatri Chakravorty Spivak," *Sociological Review,* 53, pp. 228-244

6) Hassard and Cox によると、たとえば Alcadipani, R. and J. Hassard (2010), "Actor-Network Theory, Organization and Crituque: Toward a Politics of Organizing," *Organization,* Vol. 17, No. 4, pp. 419-435; Hinchliffe, S., M. Kearnes, M. Degen and S. Whatmore (2005), "Urban Wild Things: A Cosmopolitical Experiment", *Environment and Planning D: Society and Space,* Vol. 23, No. 5, pp. 643-658; Bruce, K. and C. Nyland (2011), "Elton Mayo and the Deification of Human Relations," *Organization Studies,* Vol. 32, No. 3, pp. 383-405 がある。

（秩序）とポストモダニズム空間（カオス）の移行可能性による方法論的結合の可能性を提示しようとした。本節では、こうしたモダニズムとポストモダニズムの二元論を複雑性の科学で橋渡ししようとした Boisot and McKelvey（2010）の主張をたどってみる。

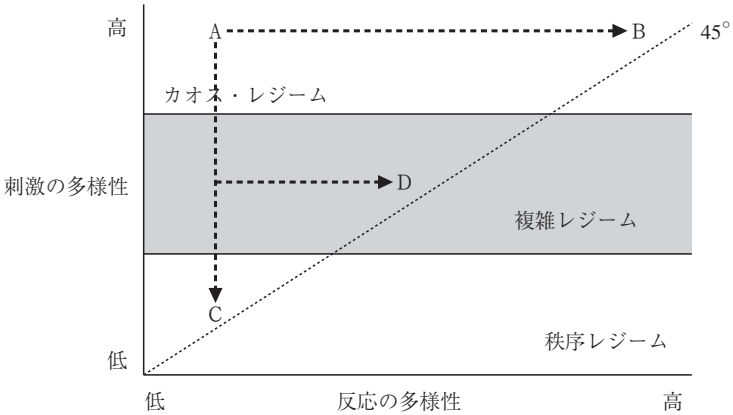
さて、この橋渡しのキータームとなるアシュビー空間とは、Boisot and McKelvey によると、図２のような「外的刺激（環境・構造要因）の多様性」の程度（縦軸）と、それに対する「エージェント（行為者）の反応（responsiveness）の多様性」の程度（横軸）の関係を図式化したものである。45°の対角線上は、外的刺激の多様性と反応の多様性がマッチしている箇所で、ここで環境・構造と主体は「適応」（adaptive）していることになる。この対角線よりも上の部分は、刺激の多様性が高いにもかかわらず、反応の多様性が低いため、環境・構造に主体がマッチせず、適応できていない状態にある（Boisot & McKelvey 2010, p. 421）。

生物学的にこの状態は環境のなかで主体がサバイブできない状態なので、生き残りのため、外的刺激（環境・構造要因）の多様性に適応しようと、エージェントはポジティブ・フィードバックを繰り返して、淘汰を経ながらある種のスキーマを選択していく。一方対角線より下の部分は、刺激の多様性に対して、反応の多様性が過剰になっているため、エネルギー資源の無駄が生じている状態である（Boisot & McKelvey 2010, p. 421）。この状態においては、エージェントに反応の多様性の縮減を起こすネガティブ・フィードバックが生じている（柏木 2013, 16頁; Gell-mann 1994, pp. 23-25）。

2. ３つのレジームにおける方法論的特徴

Boisot and McKelvey は外的刺激の多様性の高低にしたがって、秩序レジーム（ordered regime）、複雑レジーム（complex regime）、カオス・レジーム（chaotic regime）の３つのレジームに分類し、それぞれのレジーム内での諸規則性の有無を確認している（Boisot & McKelvey 2010, p. 421）。多様性の低いレベルにある秩序レジームでは、外的刺激の多様性は、たとえばデータ

図２：アシュビー空間



（出所）Boisot & McKelvey 2010, p. 421

圧縮のような規則にしたがって単純化されるため、エージェントの反応も必然的に限定されていき、外的刺激の多様性と適応させられる（Boisot & McKelvey 2010, pp. 421-422）。いいかえれば、ここはモダニズム的な還元主義によって決定論的に説明される世界で、エージェントの反応（たとえば行為）も予測可能である。

一方カオス・レジームでは、規則性の存在が認識できないため、外的刺激の多様性はそのままに、エージェントの反応の多様性が「自然の手によって」外的刺激の多様性とマッチングできる程度にまで増大していくことになる。こうした高度な多様性の世界は、モダニズム的世界（秩序レジーム）では認識できなかったポストモダニズム的世界で、多様性をデータ圧縮したりするなど任意に取捨選択する視点をもたない（Boisot & McKelvey 2010, p. 422）。そのため規則性のもとに現象を還元できず（せず）、このパレートの法則の世界では予測不能な創発的現象が生まれることもある。

ただ、Boisot and McKelvey によると、マネジメント・組織研究の対象の多くが実はこの秩序レジームとカオス・レジームの中間にある複雑レジーム内にあるとされる。そこではカオス・レジームの現象のように全く規則性が

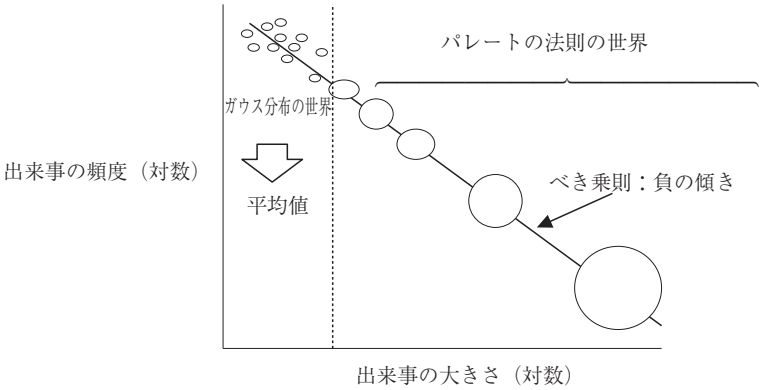
みえないわけではないが、かといって秩序レジームにあるような規則性を完全に把握できるわけでもない（Boisot & McKelvey 2010, p. 422; 柏木 2013, 19頁）。

たとえばある現象が複雑レジーム内にあった場合、マネジメント・組織研究者はその現象を図２のＣ方向へとデータ圧縮を通じて環境・構造要因を縮約し、統計的手法を用いてエージェントの反応を予測しようとする傾向が強い（Boisot & McKelvey 2010, pp. 418-419, p. 422）。こうした手法が近年のマネジメント・組織研究では一般的であろうが、しかし、上述のように複雑レジームにある多様性全てが「オッカムのかみそり」によって還元できるはずもない。秩序レジームではノイズとみなされる「限定的なばらつき」もその相互の結びつきしだいで、複雑レジームでは結果として重大な出来事となりうる。還元できない不確実性に研究者が直面した際には、Ｄ方向への移行を観察せざるを得ず（Boisot & McKelvey 2010, p. 422）、そこではケーススタディの記述など多様性の適応の動態を分析する手法がとられる（Boisot & McKelvey 2010, p. 420）。

ここに質的方法の必要性が強調される理由がある。Boisot and McKelvey はこのモダニズム的方法とポストモダニズム的方法の２つの相対的関係を、出来事の頻度と大きさの関係を図式化した図３で表している。その左上部は正規分布の妥当性が強いガウス分布の世界で、前掲図２の秩序レジームに相当する。もちろんここでは方法として量的方法が適切であるとみなされる。しかしこのモダニズム的方法論は右下部の領域に下がれば下がるほど、それによって獲得される一般性はますます維持されなくなる（Boisot & McKelvey 2010, pp. 424-425）。

他方、右下部はべき分布が支配するパレートの法則の世界であり、先のカオス・レジームに該当する。そこでの現象の生起は質的方法によって理解される。しかしこのポストモダニズム的方法は理論一般化のために排除される要因が（究極的には）ほとんどないと考えるため、多様性の海を彷徨し、「終わりのない会話」（“infinite conversations”）に終始してしまう可能性が

図３：定型化されたべき分布



（出所）Boisot & McKelvey 2010, p. 417

ある。

そのため、Boisot and McKelvey は、図３左上部の繰り返し生じる頻度の高い要因で、しかもその分多様性の低い要因の帰結の意味ですら、特定化できず（されず）、理論選択はおろか一般化も不可能となり、こうした方法が実践にまったく役立たないことになってしまうとしている（Boisot & McKelvey 2010, pp. 420-421）。

3. モダニズムとポストモダニズムの二元論をつなぐレジームと研究手法

組織研究の対象となる現象が秩序レジームとカオス・レジームに明確に区別できるのであれば、各々のレジームに妥当なこの２つの研究手法を効果的に用いることができるだろう。しかし先にも述べたように、組織研究の対象はそのほとんどが複雑レジームにあるとされる。つまり、図３の領域では、エージェント反応の適応次第で規則性が見出されるかもしれないし、または全く見出されないかもしれない。いずれにしても量的方法・質的方法もこの領域においては適応の姿を明確にしめすことができず、それぞれに限界をもつ。組織研究の深化はここに行き詰まり、モダニズム的組織研究とポストモダニズム的組織研究の間に大きな溝が必然的に生じる。従来の二元論的世界

の分断もこうした限界に起因するものであったといえる。

しかし Boisot and McKelvey は、このような分断によって原子的存在論（モダニズム的存在論）かコネクショニズム存在論（ポストモダニズム的存在論）かのいずれか一方を選択するのではなく、これらの存在論はむしろ特定の目的のために、ある対象に向けられるところのレンズであるべきだとしている。そのため、この２つの存在論を対置させたままにせず、複雑性の科学の概念を用いることでそれらの間を橋渡しできるとする（Boisot & McKelvey 2010, pp. 423-424）。その際、Boisot and McKelvey がその具体的手法として導入したのが、スケーラブル・アブダクション（scalable abduction）である。

スケーラブル・アブダクションとは、古くは Peirce が推論の種類として演繹・帰納に付け加えた「アブダクション」のことである。それはある規則性のなかでアノマリーが生じた場合、それをうまく説明できるための枠組みを新たに推論することといってよい。これにスケーラビリティを含意したアブダクションとは、規則的な出来事（適応）から予測不能な（とくに重大で影響力の多い）出来事（適応）を包括するスケールフリーの原因に注目して推論を進めることを意味する（Boisot & McKelvey 2010, pp. 425-426）。

このことから、スケーラブル・アブダクションは、図３の左上部のモダニズム的世界の量的研究結果と、右下部のポストモダニズム的な質的研究結果を結びつけ、「それらの間を行き来し、ささいな出来事が極端な結果に増幅されるところのダイナミクスを追跡することができる推論エンジンを供給する」（Boisot& McKelvey 2010, p. 426）。このようにして Boisot and McKelvey は、複雑性の科学の方法論的戦略を採用することで、モダニズムとポストモダニズムの二元論的分断の深い溝を埋めようとした。

V　各モデルにおける組織研究（史）上の意義探究

1. BM モデルへの懐疑

以上において BM モデルを刷新しようと新たな類型化基準を設けた３つ

の組織分析諸モデルを概観した。まず Deetz は BM モデルで絶対視された客観＝主観次元を解き放ち、通訳不可能性に起因する各パラダイム間の対立を現実の研究態様から否定しようとしていた。つまり、実際の研究においては全てのディスコースを網羅することはなくても、複数のディスコース間をまたいで行われることはよくあることで、そうした多元化と補完性の関係を組織分析の枠組みにしっかりと反映させることが意図されていた。

とりわけ、そこには機能主義者パラダイムの支配を中心とする組織分析観を脱却させたい狙いがあったように思える。そのため従来の二元論的分類（客観＝主観次元）ではなく、それに代わるローカル／エマージェント＝エリート／アプリオリの次元が取り入れられたのである。ディスコースの多元化と補完性は、もちろんこれまでの組織分析のなかでも指摘されるところであったが、Deetz の試みはなにより、従来の客観＝主観次元の物差しでは現代の組織研究をとらえる上で限界があると判断し、その刷新を図ったことに重要な意義がある。

ただ、この類型化次元それ自体は、BM モデルの次元を大きく刷新しているわけではない。Deetz も記すように（Deetz 1996, p. 195）、そこでは研究者と研究対象の関係がまず問われている。つまり、研究者と対象を一旦独立的なものとして、研究者が対象を「一般的に」とらえようとするのか、あるいはそれらが一緒になって相互作用して研究が進んでいくのかがポイントとなっている。したがって、それは存在の実在性・非実在性、そしてそれを認識する手立ての問題となっており、とどのつまり、存在論・認識論（方法論）の次元からの考察になる。となると、客観＝主観の二元論が形を変えて再び現れることとなり、そこからの完全な脱却が Deetz（1996）では困難になる。

2. 二元論的対置の脱却

その点、Hassard and Cox（2013）は BM モデルの類型化基準をいったん受けいれた上で、こうした客観＝主観の二元論の極をとらない、つまりどちらともいえないような科学的性質を有する第三のパラダイムを提示することで、

BM モデルを更新しようとした。

Hassard and Cox は、BM モデル以後の組織研究のメタ理論的特徴がポスト構造主義・ポストモダニズムの台頭にあると考え、従来の構造＝エージェンシーの二項対立的な、いわば、客体中心（客観）＝主体中心（主観）の二元化の境界を緩めていった。それがゆえに、かれらは今後の組織研究における方法論的な進化としてパラダイム・トライアンギュレーションに基づくリサーチ戦略の進展に大いに期待した。パラダイム的に「重複し合う部分」と「矛盾しあう部分」の両方を意識して、組織現象に関するより包括的な方法論を提示できると考えたのである（Hassard & Cox 2013, p. 1717）。

つまり、ここでパラダイムは、（客体中心の）客観＝（主体中心の）主観あるいはレギュレーション＝ラディカルチェンジの二次元の通訳不可能なリサーチ・コミュニティ群ではなく、Hassard and Cox にいわせると、「エッジランド」に囲まれたフィールドといえるものである。この「エッジランド」といわれるフィールドの境界部分において他パラダイムとの絡み合いが生まれ（つまり重複し合う部分）、それによりその理論と方法が狭くもなれば広くもなって、知的に発展させられるのである（Hassard & Cox 2013, p. 1707）。

このような点からみると、ポスト構造主義・ポストモダニズムの考えが、たとえば、Derrida のいう「脱構築」に代表されるような思想潮流であるとすると、「伝統」といった従来の思考様式、とくにモダニズム的な二項対立の図式を一度解消し、そこで見逃されていた諸事実や根拠をあらためて問い直すことにその特質があるといえるだろう（デリダ 2000, 14頁；岡本 2015, 172-173頁）。これは、Deleuze and Guttarin の『千のプラトー』（*Mille Plateaux*）のなかで脱領土化＝領土化、ノマド＝定住民、平滑空間＝条里空間などの対立概念が、実は樹木型世界とリゾーム型世界の表裏一体性を内包していると、岡本（2015）が指摘したことにも通じる（岡本 2015, 152頁）。

この点において、Hassard and Cox が BM モデルを踏まえつつ、それ以降のメタ理論的思考枠組みの１つであったポスト構造的パラダイムを組織分析にとりいれることで、構造的パラダイムとアンチ構造的パラダイムの融解を

誘発する組織研究の脱構築作業を推し進めていたことは注目に値する。

3. リゾーム型世界の実現・拡大

ただ、この Hassard and Cox のように組織研究の脱構築を進めるにあたって、もし Deleuze and Guttari が格闘したような、リゾーム型世界の実現・拡大命題のなかに Hassard and Cox が組織研究のフロンティアをみようとしているのであれば、かれらの試みはまだ一面的であろう。というのも、それは、かれらのポスト構造的パラダイムの設定がアンチ構造的パラダイムの細分化にすぎず、メタ理論的分析枠組みの本当の新機軸（リゾーム型世界の実現・拡大）を打ち出して、組織研究のフロンティアを開拓しているわけでは決してないという事情があるためである。

かれら自身もそれは認識していた。実際「われわれの分析は初期の組織研究の業績、とくにパラダイムの理論化とその方向性に関する理論化に頼っている点において、大いにレトロスペクティブである」（Hassard and Cox 2013, p. 1705）と語っている。しかしかれらの試みが一面的であるのは、なにもそれだけではない。かれらは BM モデルを土台にして社会学研究上の組織分析に焦点を当てているため仕方のないこととはいえ（Hassard & Cox 2013, p. 1702）、かれらの推し進めた組織研究の脱構築は社会学研究上にとどまるのではなく、社会学を含む「社会科学としての組織研究」も文字どおり脱構築していかなければならないのである。

つまり、「社会科学の性質」を設定する際の前提となっている「自然科学＝社会科学」という二項対立的な組織研究の上で BM モデルを更新するのではなく、それを隔てる概念枠組（現前性）[7] の解消とそこでのリゾーム型世界の実現・拡大をめぐる理論の適用を徹底して検討しなければならない。そうでないと、ポスト構造主義・ポストモダニズムを組織分析の枠組みに取り入れた意義が全面的に開花しないのである。

7） ここでは目の前にあるということだけでなく、土台や基礎として「現に存在させている」という本質・実体概念を含めた意味として「現前性」を用いている。

リゾーム型世界の実現はなにもANT、知の考古学・系譜学、プロセス理論、オートノミズム、ポスト構造的フェミニズム、ポスト・コロニアリズムといった社会科学の分野だけに限定されるものではない。それはさらに自然科学の領域にもみいだすことができよう。

その際、橘（2015）が、メタファーとしてリゾーム型世界を「複雑系のスモールワールド」と理解しているように（橘 2015, 46頁）、リゾームの連結性・非等質性の原理、多様体の原理、非意味的切断の原理、地図作成法の原理といった特性はフラクタル構造と相似しているといえる。このことから組織研究のフロンティアでは、当然のごとく複雑性の科学を取り込むものも数多くみられる。その一例がⅣで考察したBoisot and McKelvey（2010）であった。

4. 脱構築の再生産

Boisot and McKelveyは、現代組織研究にあるモダニズムとポストモダニズムにある大きな隔たり、すなわち二元論的対置を「脱構築」させる1つの方策として、複雑レジームを設けた。それによって二元的世界を橋渡しし、BMモデル以来のパラダイム間関係の議論にまったく新しい視点を持ち込もうとした。これを存在論的な立場でみると、かれらは、組織研究の存在論的前提が原子的存在論かコネクショニズム存在論かといった択一的な問題ではなく、それらが相互に補完的・依存的（contingent）な関係にあるものと考えた（Boisot & McKelvey 2010, pp. 423-424）。端的には図3でこの2つを併存させていた。

もし右下部のパレートの法則の世界での現象を扱うのであれば、エージェントの多様性は環境・構造の多様性に適応しようとコネクショニズム的な（ポジティブ）フィードバックを生み、場合によれば、予測不能な重大事態が生まれることさえある。逆にこうしたコネクショニズムは左上部のガウス分布の世界では限界を有する（Boisot & McKelvey 2010, p. 424；柏木 2013, 24-25頁）。しかし、Boisot and McKelveyは点線部分の「カオスの縁」[8]をま

さに原子的存在論とコネクショニズム存在論の「メルティング・ゾーン」として、この２つの存在論を連続体のうえに等置し、そこにある現象をスケーラブル・アブダクションによってヒューリスティクに読み解こうとしたのである。

こうした方法論的戦略をもとに、Boisot and McKelvey は、マネジメント・組織研究においてはモダニズム＝ポストモダニズムの認識論よりも複雑性の科学に基づく認識論の方が包括的な正当性をもつとして（Boisot & McKelvey 2010, p. 429）、「モダニズムとポストモダニズムの間のパラダイム競合は成果の少ないものである」（Boisot & McKelvey 2010, p. 429）とはっきりと述べている。

かれらのいうように、組織現象の大半が複雑レジームにあるものなら、この世界観にある不確実性を前提にしたべき分布でとらえる視点は、これまでも指摘されていたことではあるが（梶脇 2009, 241頁以下）、今後の組織研究においてますます欠かすことはできないであろう。こうした進展によって組織研究の脱構築は今後もいっそう推し進められ、自然科学＝社会科学の枠を超えた科学の本質的深層にまで組織研究は解体され続けていくことになるであろう[9]。

Ⅵ　むすび

Deleuze and Guttari は、樹木（条里空間）とリゾーム（平滑空間）の関係を永続的な対置関係（＝二元論）におくのではなく、むしろそれらが相即的に混合しうる可能性に言及した。そして中心的システムと非中心的システムの転化こそが人間・社会・事物の本性に内在していることを明らかにした

8）　カオスの縁は、二次的な臨界点を想定するなら「秩序の縁」ともいえるが、Boisot and McKelvey の複雑レジームとカオス・レジームの区別は、その多様性の程度、規則性の程度を明確に判断しづらい。組織現象がなぜ複雑レジームでみられ、カオス・レジームにあまりないといえるのか、不明である。そのため、「カオスの縁」概念もそれが複雑性レジーム自体を意味するのか、それとも複雑レジームとカオス・レジームの境界を意味するのか不明瞭のままである。

9）　神経科学を取り入れる経営学研究も近年ではみられる（梶脇 2011）。

（ドゥールズ／ガタリ 1994, 531頁）。Derrida の脱構築はまさにこうした二元論的対置を解いて、その前提＝現前性をカッコのなかに入れる作業であった。

Deetz が BM モデルとその後のパラダイム論争に潜む二元論的現前性の無効性を暴き、Hassard and Cox が構造的パラダイム＝アンチ構造的パラダイムの対置を融解するポスト構造的パラダイムの出現を指摘したことは、まさに組織研究の伝統形式を脱構築した結果として大いに評価される。

ただ、Hassard and Cox の脱構築作業は科学の永続的な営みとして組織研究のなかに必然的ビルトインされることになり、結果、かれらのなかで前提にされていた現前性も解体されていく運命にあった。つまり、自然科学＝社会科学という二項枠組みのなかで組織研究を社会科学のみに限定することはおのずと不可能で、Boisot and McKelvey が行ったように、対象世界の複雑性・不確実性から組織研究はあらゆる方法に開かれていなければならなくなる。

こうした組織研究の脱構築の推進力、いいかえると科学進展の原動力は Derrida のいう「差延」といえようが、それは秩序レジームであれ、カオス・レジームであれ、あらゆる存在（現象）が差異化の結果に過ぎず、そこには現前性、つまり存在の前提・本質・実体がなく、ただ差延の運動としての痕跡があるのみとされる（デリダ 2000, 16-17頁；岡本 2015, 180-181頁）。つまり、ここで組織現象にいかなる実体・本質をも求めることができないのなら、組織研究は、ゆらぎや変異を内包する諸要素（諸力）の暫時的合成としての運動態[10]（それがもたらす痕跡）をたえず追究していかなければならない。組織研究は自らのアイデンティティ（科学性）を相対的な差延のなかで

10）藤本（2015）は、この運動がゆらぎ、変異を内包しているが、その蓄積が閾値を超えると突然と革命的変化を引き起こすことを素描している（藤本 2015, 91-95頁）。ただ、こうしたゆらぎや変異が常に差異化（システムの転化）をもたらすわけではなく、小さなゆらぎや変異では、樹木の秩序は保たれ、同質性を維持する。こうした意味で同じことの反復は差異化の原動力とされ、同質性と多様性は表裏一体とされる（藤本 2015, 96頁）。

確立する過程において、常に新たな差延の生成潜在性のため解体され続けていくことになるのである。

もしこれを踏まえるとするなら、さしあたって現在の組織研究は、こうした「実体なき実在」という存在論的仮定から組織現象をとらえ、ゆらぎや変異から生じる差異化としての樹木とリゾーム、つまり秩序レジームとカオス・レジームの転化と混合の条件（その境界条件）をまずは探究する必要があるといえるだろう。

（筆者は龍谷大学経営学部教授）

引用文献

Boisot, M. and B. McKelvey (2010), "Integrating Modernist and Postmodernist Perspectives on Organizations: A Coplexity Science Bridge," *Academy of Management Review,* Vol. 35. No. 3, pp. 415-433.

Burrell, G. and G. Morgan (1979), *Sociological Paradigms and Organisational Analysis,* Heinemann.（鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳（1986）『組織理論のパラダイム—機能主義の分析枠組—』千倉書房）

Deetz, S. (1996), "Describing Differences in Approaches to Organization Science: Rethinking Burrell and Morgan and Their Legacy," *Organization Science,* Vol. 7, No. 2, pp. 191-207.

Easterby-Smith, M., R. Thorpe and Paul. R. Jackson (2015), *Management & Business Research,* 5th edition, Sage edge.

Fabian, F. H. (2000), "Keeping the Tension: Pressures to Keep the Controversy in the Management Discipline," *Academy of Management Review,* Vol. 25. No. 2, pp. 350-371.

Gell-Mann, M. (1994), *The Quark and Jaguar : Adventures in the Simple and the Complex,* Freeman.（野本陽代訳（1997）『クォークとジャガー』草思社）

Hassard, J. and Julie W. Cox (2013), "Can Sociological Paradigms Still Inform Organizational Analysis? A Paradigm Model for Post- Paradigm Times," *Organization Studies,* Vol. 34, No. 11, pp. 1701-1728.

Sarup, M. (1989), *An Introductory Guide to Post-structuralism and Postmodernism,* the University of Georgia Press.

Westwood, R. and S. Clegg (Eds.) (2003), *Debating Organization: Point-Counterpoint in Organization Studies,* Blackwell.

岡本裕一朗（2015）『フランス現代思想史—構造主義からデリダ以後へ—』中公新書。

柏木仁（2013）「現代キャリア研究のベストアプローチを求めて—複雑系の科学によるモダニズムとポストモダニズムの融合—」『亜細亜大学経営論集』第48巻第２号、3-33頁。

梶脇裕二（2009）『ドイツ一般経営学史序説―経営学の本質を求めて―』同文舘出版。
梶脇裕二（2011）「シャンツにおける神経科学的経営学の進展状況について―暗黙知の神経科学的基礎づけと利用可能性を通じて―」『龍谷大学経営学論集』第50巻第４号、82-95頁。
橘玲（2015）『「読まなくてもいい本」の読書案内』筑摩書房。
デリダ，J.（2000）『ポジシオン』（高橋允昭訳）青土社。
ドゥールズ，G.／F. ガタリ（1994）『千のプラトー』（宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳）河出書房新社。
バルト，R.（1979）『物語の構造分析』（花輪光訳）みすず書房。
藤本一勇（2015）「『新しい唯物論』方法序説（素描）」『現代思想』第43巻第10号、91-103頁。